
人魚の居るホルマリンプル

ei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚の居るホルマリンプール

【Nコード】

N5873Q

【作者名】

e i

【あらすじ】

我が家に人魚がやってきた！活きがいいから生きている。私は喜喜として迎えたけれど、あれ、ちょっと待て、ホルマリン漬けじゃないか？これじゃあ食べられない！そんなこんなで始まるラブコメディ。

1 (前書き)

題名はこちら) <http://2007.noor.jp> からおかりしました。

人魚の肉を食べると不老不死になれるらしい。

それはすばらしい！そう思った。

だから、パパに頼んで人魚を買ってもらうことにした。

「まったく、今のスーパーはどこもなっていないな。人魚をおいていないところが一つもない！」

苦労した、とパパは言ったが、結局買ってきてくれた。店頭に置いてなかったから、人魚は家まで送ってもらうことになった。送料はもちろん無料だ。

パパが持ち帰った印字のうすいレシートには『食用人魚』と書いてあった。私はその文字を指の腹で何度もなでた。

食用人魚、食用人魚！これはまちどおしい。

そうして待つこと約十日。人魚が我が家にやってきた。

「おお、活きがいいな」

これはパパのせりふ。

「まあ、かわいい人魚さん」

続いてママが言った。

確かにかわいい。色は白いし目はぱっちり。長い黒髪がよく似合っている。アイドルにもなかなかないよこんな美少女。うらやましいぞこのやろう。

下半身が魚でなかったら大変なことになっていただろう。けれど。

私ははて、と頭をかしげた。大きな水槽の中で人魚は何かを喚きながら暴れている。その所為で水槽から液体が溢れる。

「パパ、食用人魚じゃなかったっけ？」

「ああ、そのはずだ」

「困ったわ、ママ、魚なんてさばいたことないのに」

ママはため息をついた。

そうだ、ママはたいそう家事が苦手で、包丁を持たせると殺人鬼になりかねない。

「飯島さん呼びましょうか」

飯島さんというのは、うちのお手伝いさんだ。今は病院にいる。

理由は、省略させてほしい。ママも飯島さんの件を通していろいろ学んだ、ということだ。

「呼べるわけないだろう。あの人は、もうお前の影をみるだけで窓から飛び降りそうになるんだぞ」

それに、今飯島さんは身体を動かして良い状態ではない。

「じゃあ、別のお手伝いさん呼びましょうか。ママ、そろそろ出前は飽きたもの。それに部屋もかたしてもらわなくちゃ。洗濯物も溜まってるわ」

そうね、それがいいわね！とママは意気揚々と電話を手にとる。

「待つて」

私はそれをとめた。

「私、この人魚食べられない！」

パパとママが私を見つめる。

「どうして？」

だって、だって！

「この人魚、ホルマリンに入っているんだもん！」

「は？」

ホルマリンは無色透明、刺激臭があり、生体に有害。そんなもの

につけられている人魚を食べるなんて！

「ああ、そういえばそうだな。なんだか臭いと思ったら」

「大丈夫よ、少しくらい」

「いや、私、ぜったいいやだからね！」

人魚を食べて不老不死になる前にホルマリンの所為で死んだらどうするのだ！そんな危険な賭け、出来るわけがない。

「それじゃあ、こうしましょう。人魚を洗うの、お風呂で、きれいに、ね。そうしたらきつとホルマリンはとれるわよ」

「そうかなあ」

「そうよ」

ママの提案により、人魚を洗うことになった。もちろん、私からだ。

「ええー、なんで私が洗わなくちゃいけないの！」

「当たり前でしょう、あなたが食べたいって言ったから買ったんだもの」

それもそうか、と私は水槽の乗った台車をお風呂場まで押していた。私って、じつにすなお！

けれど、この水槽、本当に重い。それも当たり前か。だって私と同じくらいに見える人魚が入った水槽だもんね。

「ががぐつぶがぶがっ」

人魚は未だに喚き続けている。

「はいはい、わかったわかった」

これでもわかったふりは得意だ。

私は人魚をバスタブに移そうと水槽を斜めにした。お、重い！と思った次の瞬間、がごんつとすさまじい音がして、水槽が横に倒れた。ずべべーつと水槽から人魚が飛び出してバスタブに頭をぶつけた。

「がっ、ごべん・・・！」

私はとりあえず謝った。自分に非があるにしろ無いにしろ、謝っておいたほうが人間関係は円滑に運ぶのだとパパが言っていた。も

ちろん、今のは私に非がある。

それにしても、臭い。私は思わず鼻を摘んでいた。そのせいで謝罪がうまく伝わった気がしない。

バスタブをのぞきこむと、

「うん？」

目を瞬かせる。あれ、尾ひれが足になっている。足の間には、あれ、可憐な乙女には不似合いな異物が。それに目が止まって、目が点になるというのはこういう事態をいうのだな、と思った。

「ち、痴女お！」

人魚が大声で叫んだ。

し、失礼な！

私のどこをどうみて言うのだ、この露出魔が。

そう思いながらも、私はお風呂場から走って出た。そのまま両親のいるリビングに向かう。

「パパ、ママ、詐欺だよ、詐欺！あれ、人魚じゃなかった！」

ただの露出魔だった！

「なんだって!？」

パパとママが急いでお風呂場に行く。

私もその後を追うと、お風呂場の前で固まる二人の姿を見つけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5873q/>

人魚の居るホルマリンプル

2011年10月5日13時19分発行